

# 現代女性歌人作品における「母の詠」考察

——五島美代子と栗木京子の比較を中心に——

草 木 美智子

## はじめに

短歌において「母」の視点で「子」を詠んだ作品は数多くある。また「母の歌人」と呼ばれる女性歌人も存在する。その代表格が、五島美代子であろう。一八九八年（明治三十一年）、東京の教育一家で生まれた五島美代子は、第一歌集『暖流』（一九三六年、三省堂）の「序文」で川田順から「母性愛の歌によって、前人未踏の地へ健やかに第一歩を踏み入れた」と歴史的な評価をされている。これは、古来、女性の歌には、母性愛の歌が質量ともに劣り、『万葉集』でさえ数首しかないと指摘した上での評価であった。川田順が記したように、母性愛の歌は、「母の歌人」としての美代子の揺るぎない存在感を作り、その作風は、母の歌の一つの典型となった、と評されている<sup>①</sup>。

五島美代子以降、「母」の視点で「子」を詠んだ歌人は多いが、その一人に一九五四年（昭和二十九年）生まれの栗木京子がいる。現代女性歌人の一人である栗木京子は、著書の中で幾度か「母の歌人」である五島美代子について着目し、述べている。また、栗木の第八歌集『水仙の章』（二〇一三年 砂子屋書房）では、二つの主題、「東日本大震災」と「母の介護」が詠まれている。具体的には、「東日本大震災」関連の歌が九八首（二〇・八%）、「母の介護」の歌が三八首

(八・一%)あり、他のテーマより圧倒的に目立つ存在となっている。加えて本歌集では、家族を通して「東日本大震災」を読む手法を取っているのが大きな特徴であるといえるだろう。また本歌集以前にも栗木は「家族詠」を多く詠んでいる。一九七九年(昭和五四年)結婚後の栗木の短歌には「家族詠」が目立ち、九冊の歌集には四二二首(一一・一%)が収められている。その内訳は父三五首、母一〇七首、兄七首、祖母二二首、祖父四首、叔母二首、伯父三首、叔父三首、夫七一首、息子一五二首、妻である自身一三首、家族(家庭)一二首である。特に目立つのは一五二首(四・三%)読まれている「息子」と二〇七首(三・一%)詠まれ、第八歌集『水仙の章』のキーパーソンでもある「母(栗木の実母)」である。

では、「母」の視点で「子」を詠む両歌人、五島美代子と栗木京子の共通点、異なる点は何か。そこで本稿では、栗木京子短歌の原点ともいえるべき「家族詠」、特に「母」の視点について考察し、その結果を活用しながら、栗木が着目し、「母の歌人」と呼ばれる五島美代子の作品との比較を中心に行う。そうした手続きを経ることで、栗木の「母」の視点、表現方法が多角的に見えてくると考えられるからである。なお、本稿で用いる「母の詠」とは、「母の視点で子を呼んだ歌」、「子の視点で母を詠んだ歌」のことであることを先に述べておく。

また、二〇一八年七月二四日に栗木の第十歌集『ランプの精』(現代短歌社)が刊行されたが、本稿には含めないこと、加えて本稿に引用した作品に付した傍線はすべて引用者によることも述べておく。

## 一、二人の女性歌人五島美代子と栗木京子

まず、五島美代子<sup>2)</sup>と栗木京子との関係について述べることにする。五島美代子を語る上で、夫、茂の次の評言は重要と思われるので次に引用する。

五島美代子は和歌史上はじめて胎動を詠んだことで知られる。母胎である自身の初体験をはじめて歌に詠んだ。二千年の長い歌人の誰一人としていぶかしくも詠まなかった胎動である。そのコロンプスの卵の役を演じた。これは今も特筆に値する。今日の女歌人の誰もが誇りを以て胎動を詠んでいるからだ。

これは夫の茂が『新輯 母の歌集』（一九五七年 白玉書房）の「解説」で述べているものである。茂が述べているように五島美代子は胎動を詠んだ「母の歌人」であり、五島美代子を語る上で重要な視点となろう。

次に五島美代子と栗木京子の接点について述べる。先にも述べたが、栗木は美代子について幾度か著書で触れている。その一つが、二〇一三年に刊行された栗木京子『うたあわせの悦び』（短歌研究社）にある。本書で、栗木は同一のテーマ、素材を持つ古典和歌と現代短歌の歌合わせを行った。その〈第三番〉テーマ「亡き子」で、栗木は美代子の歌を紹介している。ここでは、〈古典和歌〉和泉式部の歌と〈現代短歌〉五島美代子の歌合わせの形式を取っている。それが次の歌である。

とどめおきて誰をあはれと思ふらん子はまさるらん子はまさりけり

和泉式部『後拾遺集』哀傷

うつそ身は母たるべくも生れ来しをとめながらに逝かしめにけり

五島美代子『母の歌集』

以上の二首の挽歌について、栗木は両者の共通点に「子を亡くした母」「中宮彰子に出仕した和泉式部母子と、聴

講生と学部生として東大に通った五島美代子母子」を挙げている。さらに、美代子の掲出歌について次のように述べている。以下を引用する。

現代でもいっしょに買い物したり旅行したりする親友さながらの母と娘はいる。二卵性母子と呼ばれる親子関係は増加の傾向にあるらしい。ただ、五島家の場合はあまりに母の愛情が深く、娘が純粋であったがゆえに、息苦しかったのではないかと推察する。戦後とは言ってもまだ旧弊な考え方の残っていた時代。「女性は大学になど行かなくていい」と主張する親もずいぶんいただろうと思う。むしろそういう頑迷な親のもとに育ったほうが楽だったかもしれない。一方的に抑圧してくる親ならば子のほうも反発しやすい。けれども美代子のように子の可能性を何よりも大切にしながらも子から離れない母、というのはかなり重かったのではなからうか。一般論としてだが、母親は自分の果たせなかつた夢を娘に背負わせてしまうところがある。

一九五〇（昭和二十五）年、ひとみは自死する。掲出歌の、

うつそ身は母たるべくも生れ来しをとめながらに逝かしめにけり

は愛娘の死の衝撃さめやらぬ中で詠まれた一首である。健やかに育った娘、これから結婚をして子を生んで母になる人生が待っていたはずなのに、まだ乙女のまま死んでしまった、と詠んでいる。（中略）和泉式部もそうだったが、単に母から娘へという流れにとどまらず、さらに娘からそのまた子へと続くはずだったのちの連鎖に思いを致している。そこに、女親だからこそその逆縁の痛ましさを読み取ることができる。

以上のように述べ、傍線部に認められるように、栗木は命を継ぐ存在である「母」の特質についても着目している。

ところで、本書『うたあわせの悦び』（二〇一三年、短歌研究社）とほぼ同時期に刊行された歌集に、栗木が老いていく母を主題に選んだ第八歌集『水仙の章』（二〇一三年、砂子屋書房）がある。従って両者には「母」という通底するものがあり、美代子の作品と比較することで栗木作品の特質を明らかにできるのではないかと考えた。

では美代子と栗木の共通点、異なる点は何であるのか。その点について両者の歌を挙げて、次に考察することとする。

## 一、五島美代子と栗木京子の「母の詠」

まず、美代子の『新輯 母の歌集』の特色は、美代子自身が「あとがき」で「かすかに胎動をおぼえ初めてから今日まで、あしかけ三十年のあひだの私の最大の関心はわが子であつた。従つて子を対象とした歌は私の全作品の過半数を占めてゐるが、本集には特にわが子を直接よんだものだけを収録した。」と述べている通り、「母」の視点で詠まれている点にある。その中でも、歌に「母」という言葉が使われているのは六九首（一三・二二）ある。そこで、着目したいのが次の二点である。一点目はこれらの「母」とは一首を除き、美代子自身を指している点である。さらに、二点目は「母われ」という強調の言葉が九首（二三）に使われていることである。また興味深い点として「母われ」は長女・ひとみの成長とともに頻出してることが挙げられる。例えば、「母われと一夜眠りてききたきことありとひそかに娘のいひに來し」で、はじめて「母われ」は登場する。さらに、その次の歌「ある日より魂わかれなむ母との道ひそひそと見えくる如し」に着目したい。この歌では、長女に自我が芽生えはじめ、今までのような「母子一体」の終わりを、美代子は感じていると言えるのではないか。その後の歌を次に挙げる。

## 長女初潮のころ

手の内に飛び立たむとする身じろき娘のは母われを意識すらしも

この歌の詞書にある通り、長女ひとみは女性になった。同時に美代子自身にも、今までのように「母」だけでなく、「われ」という自意識が芽生えたとするのが自然であろう。だが美代子は、まだ「母」である自分も決して手放したわけではない。それが、この一首以降の歌にも、「母われ」という言葉が使われた理由ではないか。また「母われ」という言葉には「母」と「自分」もどちらも共存し、選べない美代子の心情も表れているようではないか。他にも、例えば「友となりてあげつらふとき母われの批判を超えて吾子はするどし」では、一人の女性として育ていく長女ひとみと仲間意識を持つ「母」美代子の意識が窺える。それは、「母」である美代子自身が「娘」ひとみに近づいていき、また同時に、「娘」も「母」を一人の女性として意識しているとも言えよう。冒頭で述べたように、作者である美代子は、結婚前に東京大学の聴講生となり、また教育一家出身でもあることから向学心の非常に強い女性だった。結婚出産で辞めたが、日々成長する長女を見て、向学心が再度芽生えてきたのだろう。その結果、長女の東京大学入学と同時に自身も聴講生となり、学問に戻るのである。それが次の歌に表現されている。

母われも育ちたし育ちたしと思へば 吾子をおきても行くなり

この一首には、「母」であることと同時に、一人の人間として成長したい、学びたいと思う野心と、「親子」というライバルを得た美代子の心境が色濃く表現されている。さらに、それを表すのが、次に挙げる二首である。

恋人同志にも似る母と子のことば切なし稚なく言へど

恋人の如く責めあひて母と子はつひにしづかに手つないで寝る

これら二首に詠まれているように、「母」美代子と「子」ひとみの関係は「恋人同士」が一番当てはまるようだ。だが、次の一首「母の烈しき言葉受け容るる子のころまだ稚なきに底知れぬらし」の「母の烈しき言葉」にもあるように、二人の関係は決して穏やかな恋人関係ではなかったのだろう。共に成長したい「母」美代子と一方でまだ甘えたい「子」ひとみの葛藤が、これらの歌から想像できるのではないだろうか。

このように「母の歌人」と呼ばれる五島美代子は、「子」との関係を詠んでいる。では、次に同じ「母」の視点で、「子」である息子の歌を詠んでいる栗木と比較することとする。一五二首が栗木の「母」の視点で詠まれた「息子」（子育ても含む）の歌である。ここで、前掲の五島美代子の歌と比較すると、「母」という言葉がほとんど歌に出てこない点に気付く。「母」が歌に出てくるのは次の八首（五・二％）だけである。

本を読む母を嫌へる子は夫とわづかに違ふ理由もつらし

子の描きしクレヨンの線ひきのぼし巻き取り母のひと日は終はる

じやんけんの弱さは母親ゆづりにてのつぼのわが子鬼となるこゑ

Ｌサイズの子のシャツベランダに揺れて母が少女でありし日を笑ふ

犯罪は社会の責任だと言ふけれど…。

試すには及ばず 人は壊れやすきものと少年に母が教へよ

母も子も夫も邪魔と思ふとき最もじやまなわが身汗ばむ

幼な兒に母さんの顔書いてもらふしあはせなども忘れて久し

オウム真理教による坂本弁護士一家殺害事件

一歳にて殺されし子は龍彦ちゃんと呼ばるるほかなし二十年後も

生きぬればもう成人とニュースにて言へど青年龍彦さんをらず

駄々こねる幼兒にその母怒り出す二十年前の我より早く

これらの中でも「母も子も夫も邪魔と思ふとき最もしやまなわが身汗ばむ」は、栗木の「母（実母）」を表している。また、少年犯罪を詠んだ「試すには及ばず 人は壊れやすきものと少年に母が教へよ」と、オウム真理教による坂本弁護士一家殺害事件の連作「駄々こねる幼兒にその母怒り出す二十年前の我より早く」の「母」は、世間一般の「母」と自身を重ねて表現している。これら二首とも関連があるのだが、ここで「社会詠」と栗木の関係について述べておく。栗木のデビュー作であり、愛唱歌でもある「観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日我には一生」のように、初期の栗木短歌は青春期のみずみずしい恋や日常の歌が多かった。だが、結婚出産を経た栗木は、「家族」を通して時代の鋭い視点で詠むことが増えていった。特にイジメ問題の連作「薄き刃のすすすと降れる宵の顔みぞれに濡れて子の帰り来る」以降の歌には、「子」を介した「社会詠」が目立つ。その例が次の五首である。前掲のイジメ問題の連作の繰り返しとなるが、次に挙げる。

他者の死はみな透き通りカトレアの香れる卓にイジメの記事読む

薄き刃のすすすと降れる宵の顔みぞれに濡れて子の帰り来る



優等生になれずならない子<sup>1</sup>の生は飛行機雲の白さか 眩し

去る冬の太陽は地をめくめをり「少年法」とは不思議なる鞭

犯人の少年はヒトラーに心酔してゐた。

『わが闘争』<sup>2</sup>吾子も読みをり花柄のブックカバーにくるみ机上に

これらはイジメ問題、少年法、神戸小学生殺人事件関連の歌である。どれもが作歌当時の栗木の「子」の年齢と重なる問題であり、「母」である栗木にとつても大きな関心を寄せていることが認められる。これらの点からも、同じ「母」の立場で子供を詠む五島美代子と栗木京子だが、「視点」は大きく異なるようである。別言するならば、美代子は自分の心に対して求心的に詠むのに対して、栗木は遠心的に詠むという相違がある。その異なる点についてさらに考察を深めていきたい。

繰り返しとなるが、「両歌人について考察すると一つの大きく異なる点が見えてくる。それは、五島美代子の「母」の歌には、常に「母」である自分と「子」の両者の存在が明確にある点である。だが、栗木の「母」の歌には、「子」の存在や「子」を通して見る「社会」の存在はあるのだが、「母」である栗木自身の存在が目立たないのではないか。それは、美代子の歌を詠むと感じる「情感・愛情・親子・主観」が、栗木の歌からはあまり感じられない点からもわかるのではないだろうか。栗木の「子」の歌は、事実や光景を詠んでいる歌が目立つ。特に、「子」が幼い時の歌に多い。以上のことから、栗木の歌は美代子に比べると、客観的視点が目立つのが特徴であるが、それは美代子と栗木の「時代」や「子の性別」の違いだけが理由ではない。以前、栗木の歌、特に「社会詠」の特徴は数字（年月日、年齢、金額等）を多用している点であることは拙論<sup>3</sup>でも述べた。具体的には全八歌集で九七首（三・一％）あり、数字を使う理由として栗木の理学部出身との関連、クロニクル（記録）の二点があることを挙げた。栗木の「母」の視点に、美

代子とは大きく異なる「事実、光景、客観性」が目立つのも、数字を多用する理由と重なる点があるのではないかと  
いう考察が成立する。ここで、以前のインタビューで、栗木は理系出身と自歌の関係について次のように述べている  
ので引用する。

顕微鏡でいろんな細胞を毎日のようにずっと見てスケッチしていたりすると、古い細胞はもうどうしようもない  
んですよ。周りもぼろぼろになるし。そういう厳然たる事実を見てしまった。細胞レベルで人間というのは衰え  
ていくんだから、まあ、しょうがないなど知ったということは、科学を学んで良かった点です。ほんの端っこを  
かじただけですけども。

栗木が語るように、学生時代のスケッチという事実を記録する習慣は、栗木作品に強く影響を与えた。それは栗木  
作品の特質ともいえる「社会詠」だけに限ったことではない。「子」の成長を感情表現を少なくし、「子」という存在  
を記録する「母の詠」にも影響は表れているといえるのではないだろうか。

さらにもう一点、栗木には「母」「われ」に言及した一文がある。それは先に述べた美代子の「母われ」と関連し、  
歌集『乳房喪失』の作者であり、三一歳で亡くなった歌人、中城ふみ子（一九二二～一九五四年）の「われ」につい  
て、栗木が著書で述べている文章である。栗木は、中城ふみ子が生前編んだ唯一の歌集『乳房喪失』には「われ」の  
詠み込まれた歌が多いと指摘している。「われ」「我」「わが」「私」「わたくし」「己れ」などの一人称の代名詞が含ま  
れる歌は、総歌数四九一首のうち一五〇首以上あり、さらに「子」を詠むとき、ふみ子は自らを「母は（母の）」と  
表し、一八首あると述べているのだ。二男一女がいた中城ふみ子だが、「子」を詠むとき、ふみ子は自分のことを「わ  
れ」ではなく、「母」と一貫して表している。それは、「子」の前でまず「母」であらねばならない、という気負いが  
あったのではないかと栗木は言及している<sup>8)</sup>。こうした栗木の言説を考察すると、中城ふみ子のように「自分が母」だ

という意識を、栗木は自歌には意図的に排除しているようにも窺える。この点が興味深い。なぜなら、これは栗木短歌における客観的表現とも重なることが、この文章からわかるからである。この点は重要であり、看過してはならないことであろう。栗木の「一人称」の表現方法については今後も注視していきたい。

### 三、栗木短歌における「母」

前項の「母」の視点で「子」を二五二首（四・三％）詠んだ栗木だが、栗木には自身の「母」を詠んだ歌一〇七首（三・一％）と、その数が多いことも特徴として挙げておきたい。五島美代子の場合には、「母の詠」は美代子自身を指し、「子」の対比として詠まれているのが特徴である。だが、栗木の「母の詠」は自身ではなく、「母（栗木の実母）」を詠んだものに特徴がある。その異なる点も看過できない。では、栗木が自身の「母」を詠んだ歌一〇七首を挙げて考察を進める。はじめに着目したいのが、栗木と「母（実母）」の関係性と変化である。それらを表す歌を次に挙げる。

震へる母を支へ飲ませし一碗のあれは素水か湯なりしか覚えず

「泣いちゃだめ」母の声のみ身に残り骸の父と病院を出づ

むせながら母とトースト頬ばりてもう泣かぬ母と通夜の支度す

この三首は、栗木の第四歌集『万葉の月』（一九九九年、終書房）に収められており、急逝した栗木の「父」と当時の家族の様子を詠んでいる。四十代になり「父」を突然亡くした栗木は、「父」の死を境に少しずつ「母」と距離を縮めていく。その栗木の心境が表現されているのが次の歌である。

少しづつ母が親友になりてゆく葡萄色のスカーフ借りて返して

この歌から、栗木と「母」の関係が、少しずつ変化していく様子が読み取れるようである。それは、子供時代の「母」に守られていた関係から、親の老いとともに「子」が「母」を守る関係へと変化していく様子である。栗木の「母の詠」からもわかるように、「母」は認知症を悪化させ、品川にある施設に入所している。入所する「母」への「子」の複雑な心境は、第八歌集『水仙の章』掲載歌から読み取れる。栗木が「子」の視点で詠じた「母の詠」から想像する「母」は、自慢が好きだが有名歌人の一人である「子」のことはあまり認めていないようである。そのため、「短歌やめよ、資格を取れといふ母に付き添ひあゆむレントゲン室まで」と、「母」は歌人である「子」に、短歌よりも実質的な資格を取れと命じているのだ。「わかりやすき自慢しかせぬ母ならむ「娘が歌人」はまづ除かれて」でも、歌人よりも世間的な評価が高くわかりやすい医師（栗木の夫は医師である）を尊重している姿が表現されている。また次の二首にも着目したい。

車窓より湖うみひろがれり四十代の母はわれより満たされぬしか

毛糸玉ころがり出いでし母の膝恋ほしもわれも職もたぬ妻

この二首から、世間的な評価が難しい「歌人」であり、四十代主婦の栗木が比較しているのは友人や仲間ではなかったことがわかる。四十代になった「子」である栗木にとって、比較する相手は、自分と同じ年齢だった頃の「母」なのである。これらの歌から、「子」である栗木にとって、「母」とは一つの指標であり、言い換えるなら「ライバル」でもあったようだ。また「母」に対して、焦りやプレッシャーも感じていたのではないか。この点が、栗木が美代子

の「母の詠」に着目したと関係があるのではないだろうか。

## おわりに

以上、歌人の五島美代子と栗木京子の「母の詠」比較を通して分析を進めてきた。その結果、二人は、同じ「母」を詠む女性歌人だが、その視点と表現方法には、大きく異なる点があることが判明した。五島美代子にとって「母」とは「子」と対比した自身のことを差しており、「母の詠」には「母子」の存在が明確に表現されている。対して栗木の「子」を詠んだ「母の詠」には、「母」である栗木自身の存在は薄い。その理由として、栗木が詠んだ自身の「母」の歌一〇七首の存在が挙げられる。栗木にとって「母」とは、自身よりも自身の「母」を指すという心情が表されている。そのため、「自分が母」である美代子に対し、栗木には「自分の母」という異なる視点が存在するようだ。このように「母」に対して異なる視点を持つ両歌人だが、栗木が五島美代子の歌に着目し共鳴している点は何かについては、今後も考察を続けたい。それには栗木と「母」の関係性において更なる考察が必要である。現時点で考えられる理由は、栗木が長年感じていた「母」からの干渉、逃れられない呪縛やプレッシャーを五島母子に重ねているのではないかということである。

また両者の歌には、次の違いもある。それは「子」への感情が色濃く表現されている美代子の歌に対し、栗木は感情よりも「子」のいる光景や存在を記録する手法を取っている点である。これは栗木作品の特質である「社会詠」と同じ手法ではないかと考察できる。つまり、栗木にとって「クロニクル（記録）」の意味を持つ「社会詠」が「家族詠」にも波及しているということである。最後にもうひとつの共通点を述べておきたい。それは五島美代子と栗木京子の「社会詠」に対する考え方についてである。その点について佐藤和夫は、

昭和二十一年四月第二歌集『丘の上』（弘文社）を短歌五二一首、長歌二首、反歌二首収録して刊行、同歌集は昭和十一年から同二十一年までの世相を凝視し

芽ぶきたつ木々に近づけばこの空気はわが子の息のほひがする 「暮春」

上の子の児生ひいまだ目に濃きにこの子の顔が重なりて映る 「ふたたび母になりて」

手さぐりに母をたしかめて乳のみ児は橙火管制の夜をかつがつ眠る 「防空演習」

爆撃のとどろきおもふ大空は霞かさなりまどはしき光 「しづかなる春」

屈辱は苦く冷めたる初の味鮮らしくさへ身に沁みわたる 「屈辱」

と映し出しているが、特に「屈辱」で「らしくさえ身に沁みわたる」とよんでいるが、これは敗戦の思いを一時の感情ではなく正しい歴史認識としてとられているのである。このことは五島美代子の短歌の世界では、余り論じられない部分ではあるが見逃してはならない一面である。

昭和二十年十二月衆議院議員改正公布により婦人参政権が確立され、昭和二十一年四月総選挙が行われ、はじめて一票を投じた美代子は

うやうやしく礼して後の一票は音なく落ちぬ子を負へる人の 「婦選の後に」

花吹雪ひかりて包め選ばれて明日を負ひ立つわれらの中のひと 「同」

と感想を詠んでいる。

「若き世代の人々と交りてまなびつつ思ふこと多し」と詞書きを添えて

思ひがけなく吾を信じて打ち明けられし会合の場に行かざらむとする 「老醜」

ストライキの権限認められずとある今朝の新聞をよみ傍におく 「同」

傍観のこの日せつなき下燃えを知る人あらば危ふからむ 「同」

などは、理屈では理解できても若者のように、すぐに行動できない我が身のふがいなさを恥じているのである。  
五島美代子は感性の豊かな歌人のみではなく、社会を鋭く見つめる姿勢を彼女の内にうかがい知ることができ

るのである。戦後は女性の解放、自立、意識向上等が女性の間から強く叫ばれる風潮であったが、彼女はそれを表面的にのみ主張するのではなく、新しい時代の中で、今後女性がいかに歩むべきかをしっかりと認識していたが、前掲の歌群から十分理解できるのである。

と述べている。佐藤が言及しているように美代子は栗木同様に〈社会〉にも注目し、〈時代〉と〈歌の数〉こそ異なるが、詠んでいるのだ。また、佐藤は、美代子が歌集『丘の上』の「あとがき」で、「この十年間は、世界史の上に重大な時期であったことは申すまでもなく」と書いて、社会にも無関心ではなかったことも指摘している。「母の歌人」と呼ばれる美代子だが、時代を詠む姿勢は栗木と共通する点であると言えよう。五島美代子と栗木京子の「母の詠」には異なる視点が見られたが、「母」の立場から「時代」や「社会」を詠む点は類似しているといってもよいだろう。そのことから栗木にとって、視点は違いが、「母の詠」「社会詠」を詠んだ美代子の存在は大きいといえるのではないだろうか。

以上、本稿では「母の歌人」と呼ばれる五島美代子と栗木京子の「母の詠」を比較し考察をした。今後は「母の詠」を中心に他の歌人の歌を分析する必要がある。また「母の視点」からの「社会詠」も加えて考察を進めていきたい。そうすることで、五島美代子、栗木京子両歌人の「社会詠」の特質が浮かび上がると考えられるからである。

## 註

- (1) 『現代短歌大辞典』(三省堂 二〇〇四年七月)。「五島美代子」の項、執筆者は河野裕子。引用にあたっては稿

者が適宜まとめた。

- (2) 一八九八年（明治三十二年）、東京生まれ。父は現東京大学理学部教授、母も後の私立晚香高女学校校長という教育一家の長女だった。一六歳で佐佐木信綱「心の花」に入門した。一九二四年（大正十三年）四月、東大文学部の聴講生となり、後の夫となる東京外国語大学教授、石樽茂（経済史学者・歌人）に会い、翌年結婚した。一九二六年（大正一五年）、長女・ひとみを出産し、自分で育てたいと大学の聴講、教員、作歌も辞め育児に専念する。その後、一九三二年（昭和六年）、夫の留学に伴い渡英し、二年後に帰国し、「心の花」にも復帰した。一九三八年（昭和十三年）、夫と歌誌「立春」創刊。一九四八年（昭和二十三年）、長女・ひとみが東京大学文学部に入學し、美代子も聴講生としてひとみとともに東大に通う。だが、その二年後に、長女・ひとみ急逝（自死とされている）。長女・ひとみの死はその後の美代子の作風に深い陰翳と幅を加えることとなった。一九五七年（昭和三十二年）、『新輯 母の歌集』により、第九回読売文学賞を受賞した。その後も、宮中新年歌会始の選者、美智子妃殿下作歌御指南役を務める。専修大学教授、「朝日新聞」歌壇等の選者も務めた。一九七一年（昭和四十六年）、紫綬褒章受章。一九七八年（昭和五三年）四月、肝硬変により死去した。享年七十九。

以上は註①に同じ。二四一〜二四三頁を稿者が適宜まとめた。

- (3) 五島美代子『新輯 母の歌集』（短歌研究社 一九九二年十月）。同書の五島茂の解説による。一四〇〜一四三頁。
- (4) 栗木京子『うたあわせの悦び』（短歌研究社二〇一三年六月）。二九、三〇頁。
- (5) 註③に同じ。一三六〜一三八頁。
- (6) 草木美智子「栗木京子研究―栗木短歌における「数字」の役割と効果を中心に―」（『國文學試論』大正大学大学院文学研究科国文学研究室 二〇一六年三月）。九八〜一四四頁。
- (7) 伊藤一彦・栗木京子「訳のわからない自分を」『栗木京子』（青磁社 二〇一四年一二月）。七五頁。
- (8) 栗木京子「多面的な「われ」『名歌集探訪』（ながらみ書房 二〇〇七年十月）。一一〜一八頁を稿者が適宜まと



めた。

(9) 佐藤和夫「五島美代子―母性の世界―」(『親和國文』第三二号 神戸親和女子大学国語国文学会 一九九六年十二月)。二六、二七頁。